

## 「かわいそう」ではありません

神奈川県 藤沢市立湘南台中学校 3年  
寺内 瑞偉（てらうち すい）

「お腹にいるときに病気が分からなかったの。分かっていたら産まなくとも良かったのにね。かわいそうに。」

これは、まだ私が保育園児だったときに、近くを歩いていたおばあさんが突然発した言葉だ。最初、私は何が起こったのか分からず、声のする方を見上げた。すると、おばあさんは弟を抱っこしながら歩いている母に向かって話していることが分かった。弟は、先天性の心疾患がある。生まれたときから手術や入院を繰り返し、1歳過ぎまで、在宅酸素の機械を使用しなければならなかつた。もちろん、外出するときには、大きい酸素ボンベを持たないと外出ができない。だから、母はリュックサックに酸素ボンベを入れて背負い、弟を前向き抱っこして園に迎えに来ていた。弟は酸素ボンベとつないだ鼻カニュレにより酸素を吸入しているのが当たり前だった。のぞきこむように弟を見ているおばあさんに、母はそれとなく会釈し、私の手をひいて逃げるように家へ帰つた。おばあさんが言つていた、「かわいそう」とは一体何をさしているのだろうと不思議に思ったこと、母と握っていた私の手には指の跡が赤く残つていて驚いたことを、私は今でも鮮明に覚えている。

言葉の意味を理解したのは、数年後だった。たまたま目にした『コウノドリ』というドラマの中で「出生前診断」というものがあることを学んだ。これは出生前に、胎児の染色体疾患などが分かるものだ。そのため、あらかじめ疾患を知り、出生後の治療に役立てることにも、中絶という結果を招くということにもつながるのだそうだ。あの時のおばあさんの言葉が頭をよぎり、私は燃えるような怒りを感じた。大病と闘いながら生きていくくらいなら、産まないであげたほうが良かったのにと言っていたのと同じだということに気がついたからだ。弟は、生きる価値がないのだろうか、「かわいそう」な存在なのだろうか。

私はそうは思わない。私には、もう一人弟がいるのだが、病氣があつてもなくとも、どちらも変わらない大切な弟たちだ。毎日よく怒つて泣いて笑つて騒々しく過ごしている。決して「かわいそう」な存在ではない。だから、もし悪気

なく発した言葉だったとしても、この世に生まってきた命を、否定するような恐ろしい言葉だったということ、本人だけでなく家族全員を傷つける言葉だったということを知ってほしいと、心から強く思った。

自分とは異なる面をもつ人のことを「かわいそう」に感じている人が、実は多くいるのではないかと、私は思う。例えば、私は左利きなのだが、「右利きに直さなくていいの。」と聞かれたことや「左利きは不便でしょ。」と言われたことが何回もあった。物心ついたときから左利きなので、不便に感じたことはなかった。しかし、右利きが多数派で左利きは「かわいそう」というレッテルをはられているような言葉に、良い気持ちはしなかった。利き手や病気は生まれながらにして自分の一部であるのだから、個性みたいなものだと、私は思う。個性は魅力でもある。みんなが同じでは、むしろ意味がないのではないだろうか。弟は、今でも感染に気をつける必要があるため、何かと制限があり窮屈さはある。しかし、できることを、精一杯楽しんでいるように見える。いつも笑っているから、自然と周りには人が集まり、私からしたらうらやましいくらいだ。弟は魅力のかたまりである。

「多様性」について、小学校や中学校で学ぶ機会があった。多様性を受け入れて生きていくということは、自分と比べて、異なる面を持つ他者を「かわいそう」だと感じることではないし、みんなと同じでなければ不幸だということでもない。その視点にたつこそが重要だと、私は考えるようになった。

つまり、多様性とは、一人ひとりの生き方を尊重していくことで、他者を上から見ることでも下から見ることでもなく、比較することでもない。有りのままを認めて、毎日を共に生きることだと思う。そもそも、苦手なことを克服するために費やす時間は人それぞれ違うはずだ。鉛筆をにぎる練習に、弟は何ヶ月間費やしたのか分からない。手術の繰り返しで指先に力が入らなくなってしまったからだ。でも、弟は毎日練習して、今では鉛筆をにぎって文字を書けるようになった。それが全てであり、他者との比較は不要なのだ。

できなくて仕方ないとか、代わりにしてあげるというような考え方ではなく、挑戦していることをそっと見守り、できるようになったことを素直に「すごいね」と、声をかけ合える社会になれば、みんなが笑顔になると思う。きっと「かわいそうに。」という言葉や考え方もなくなり、誰もが自分らしく自分のペースで胸をはって生きていけるはずだ。そんな社会を目指して、これからも私は弟と笑顔で生きていく。